



私は勝手に彼(?)をムッシュと呼んでいる。時々、夕食に立ち寄るファミリーレストラン。夕食時も混雑していない。私は大きなテーブルで、小さな夕食をとるのが好きだ。今日はミラノ風ドリアとトマトサラダ。気が向けば仕事もする。とりとめのない事を考える。派遣社員は、社員のことを社員さんという。蔑視か、羨みか。もちろん私もそう呼ぶ。同じ仕事をしながら待遇がまるで違う。会社の都合でいつ首を切られても……。ああ、こんなのでいいのかなあといつも思う。年齢は容赦なし。結婚……。気の小さい私が、他人と暮らしていけるだろうか。それも男と。ムッシュが来た。彼がメニューを広げる。メニューにつけられた番号を押す。ボタンはムッシュの胸にある。

「ミラノ風ドリアとトマトサラダ。ありがとうございました」ムッシュは復唱する。

料理を待つ間、小説を読む。「老人と海」・ヘミングウェイ・福田恆在訳。短い小説を何度も読む。薄い本は、私のどこにでも滑り込ませることが出来た。

「この男に関する限り、何もかも古かった。ただ眼だけがちがう。それは海と同じ色をたたえ、不屈な生気をみなぎらせていた」

海と同じ色。長い間、海を見ていない。次のお休みに行ってみようか。海が見たくなる。

「お待たせしました」

ムッシュが料理をテーブルの上に置く。

「ありがとう、ムッシュ」

私は声に出さずに言う。

冬の日、仕事で遅くなった。ファミリーレストランは閉まっているだろう。コンビニで何か買って帰ろう。色々考えながら、冬の夜道を歩いた。ファミリーレストランに電気がついていた。何気なく覗くと、ムッシュがいた。床に掃除機をかけていた。彼は眠る必要も、食べる必要もない。私はそんなムッシュを見ていた。

年が明けても、私の日常は変わらない。会社へ行って働いて、家に帰って眠る。去年の、もう、去年になった、天皇誕生日に海を見に行った。誰もいない浜辺に座って海を見ていた。寄せては返す波を見ていた。私はこんな所で何をしているのだろう。友達もいない。正月は家に帰ろう。でも帰らなかった。もう家には私の居場所がない。ムッシュのことを思った。私はムッシュと同じだ。

今日は思い切って、「お子様ランチ」を注文した。ムッシュなら……。 「お子様ランチ。ありがとうございました」と復唱する。ウェイターが確認に来た。すごくいやな気分になった。私は思わず言ってしまった。

「おかしいと思う、君」

「機械ですから」

私は立ち上がった。

「もう、いい」

その日、夕食を食べなかった。

雪が降った。今年はよく降る。三回目。私はいつものファミレスにいる。今日もムッシュがない。雪だから客も少ない。車はのろのろ運転だ。車のライトで浮かび上がる雪の白さは美しい。とっくに冷めてしまったコーヒーを前にして、深いため息をついた。ムッシュがないレストランは、私の中で急に色あせていった。ウェイトレスが何回目かの水を注いだ。

「ありがとう。ここにいたロボット、近頃見かけないけれど」

「ああ、いなくなったみたいですね」

「どこへ行ったの？」

「知りません、何なら店長を呼びますが」

私は少し考えた。

「すみません、お願いします」

私は何を考えているのだろう。

ほどなくやってきた彼に見覚えがあった。お子様ランチの時の彼だった。あの時は若く見えたが、三十を少し超えていると思う。彼も私を覚えていた。

「あの時の」

彼は私の前に腰掛けた。

「ロボ・ボーイのことで？」

「ええ」

「彼は試作品だったんです。問題がありました。その一つは子供です。怖がる子供といたずらする子供。それと……」

彼は言いよどんだ。

「私の主観なんですけれど」

彼が話し始めた。とても不思議な話だった。

「初めは重宝していたんです。食べないし、休憩時間もいらぬ。文句も言いませんしねえ。一日中働く。閉店後の掃除は任せられる」

だけどムッシュは少しずつ変化していった。

「私らにだって、苦手なお客様はいます。人間ですからね」

ムッシュの態度が、客によって微妙にちがってきた。そーと音を立てずに水を置く客と、少し乱雑に置く客。

「ロボ・ボーイの接客態度が悪い客は私らが苦手だと思う客と一致しているんですよ」

それが段々と激しくなってきた。水をこぼすようになってきた。やくぎに殴られると、反撃した。

「それと」

彼は言葉を句切った。

「彼は眠るようになった」

「眠る」

「私にはそう見えました。無反応になるのです。そういうことで返品しました」

「今はどこにいるのですか」

「敦賀だと聞いています」

「敦賀？」

「福井県じゃないですか」

福井県と言われても分からない。確か北陸だ。

「何なら、本部に聞いてみましようか？」

「結構です。聞いてみただけですから」

「それはそうですね」

彼は出口まで送ってくれた。

「雪道は滑りますよ。気をつけて」

私の心は何年ぶりかで弾んでいた。敦賀へ行こう。ムッシュを探そう。

金曜日に敦賀へ行くことにする。久しぶりに休みを取った。昼過ぎに京都駅で精進弁当を買った。ちょっと迷ったが缶ビールを一本買った。二時間足らずの旅だが、一泊することにした。一人旅は何年ぶりだろう。短大の時はよく一人で出かけた。というより、人と旅することが出来なかった。枕を並べて他人と寝ることが出来なかった。一人旅は何も起こらない方がいい。ぼんやりとさまよるのがいい。過ぎ去っていく時間の中で、私は消えていく。どこにも私はいない。私は風になる。誰にも見えない風になる。

車窓に琵琶湖が見えている。琵琶湖が見えなくなると、急に車窓が暗くなった。殺伐とした風景になった。雪が降り始めた。風も強いのだろう。黒と白の世界だ。私はどこへ行こうとしているのだろう。何を求めて。

敦賀は寂しい駅だった。目立つ色はなく、光の少ないモノクロ写真のような光景だった。線路やホームがたくさんある。雪はなかった。寒さが人の口を重くさせていた。こんな所にムッシュはいるんだ。昨日、ネットで、ロボ・ボーイで検索した。ムッシュがファミレスで注文をとる様子が出ていた。橋本製作所。原発の近くにある。敦賀湾に夕日が沈む頃、バスが来た。敦賀半島にある民宿に向かう。通された部屋は二階で、近くに海を感じた。カニはあまり好きではないので、お造りをたのんだ。ビールを一本。小食で、グルメではないが、魚はおいしかった。明日は十一時の約束だ。海に行ってみよう。

朝は十時に宿を出た。灯台が見えた。あそこまで行ってみよう。灯台の扉は開いていた。作業服を着た人が二人いた。

「見学してもいいですか」

いつもなら言わない言葉が出た。二人は驚いたように私を見た。

「いや、いいです」

「かまわないですよ。どうぞ」

彼等は一月(ひとつき)に一度の点検に来ているのだ言った。階段を上がる。無限階段と言うだまし絵を見たことがある。最上階に着いたと思ったら、そこは一階なのだ。上がるのと降りるのが重なった空間。長い螺旋階段を上がりながら、恐れた。

日本海は、暗く、荒れていた。宿で、おにぎりを作らしましょうかと、言ってくれたが断った。他人の手で握られるのがいやだった。昨日駅で買ったパンを食べた。荒れている海には何もない。私はコートの手を立、タクシーを呼んでもらうため、宿に帰った。

橋本製作所は原発のそばにあった。原発向けのロボットを作っているのかもしれない。ムッシュは危険な場所で働かされているのだろうか。受付で、柳原という人を呼んでもらった。痩せた童顔の男が出てきた。

「ロボ・ボーイの事で来られた村瀬さんですね？」

「はい。譲ってもらえますか？」

「まあ、倉庫にいますが。修繕の方が高つくんですよ。でも開発費が結構かかっていますから、捨てるのもちょっと。回路を取り替えました。何に使われるんですか」

私は黙った。

柳原さんはまあいいやという感じで、

「上司と相談して、二十万円でいかがですか」

思っていたより安い。五倍でも買うつもりだった。

「大丈夫です」

「それじゃ宅配で送ります」

私は住所を書いた。彼は振込先を書いた。

「すぐに、送りますよ」

「えっ、振り込むのが遅れるかもしれません」

「全然かまわない。あなたはそんな人じゃないから」

ちょっと上目遣いに私を見て、

「もう一人、あなたと同じことを言ってこられた方がいるんですよ。タッチの差であなたの方が先だった。あっ、来られましたよ。多分あの人だ」

ドアを開けて入ってきた男に見覚えがあった。ファミレスの店長だった。彼ははにかみながら近づいてきた。

敦賀まで一緒にタクシーで帰った。車内では一言も喋らなかった。

駅に着くと、

「僕はもう少し先に行ってみようと思います」

と、言った。

私は京都に帰ると言った。

一回だけあの長いトンネルを通ったことがある。出口がないような長いトンネル。ずーと暗闇の中にいるようで怖かった。敦賀は私の終着駅だ。

「それと」

彼は言いよどんだ。

「あなたの家に行っていていいですか？私は水村と言います」

彼は名刺を出した。水村優。優の字にユウとふりがながあった。

私はしばらく黙っていた。彼も言葉を続けなかった。私は名刺を持っていない。私の仕事には名刺が必要ではなかった。私は手帳を出し、私の住所と名前を書いた。携帯の電話番号も書いた。電車の時間が迫っていたので、私はホームへ急いだ。振り返ると彼が手を振っていた。私は無視して、ホームへの階段を上った。柳原さんが、帰りがけに言った言葉が突然頭に浮かんだ。

「ロボ・ボーイが死ぬ日が来ます」

「死ぬ……」

「全機能を停止する日です」

私は何故か分かるような気がした。彼は続けた。

「明日かも知れないし、百年後かも知れない」

日曜日にムッシュが送られてきた。

「ムッシュ（ロボ・ボーイ）が来ました」と優にメールを送った。

「月曜日の午後八時に伺います。ムッシュとの再会が楽しみです」

「了解」

久しぶりに再会してスイッチを入れた。メニューボタンを押した。当然お子様ランチ。

「お子様ランチ一つですね。ありがとうございます」

懐かしい声が聞こえてきた。

「ムッシュ。君の名前はムッシュ」

「私の名前はムッシュ。名づけていただいてありがとうございます」

「ムッシュ」

「はい」

「聞いてもいい。君には心があるの」

「こころ……。分かりません。プログラムされていません」

私はムッシュをキッチンに連れて行く。コップをとり、蛇口を押す。

「できる？」

「はい」

ムッシュは正確に私の行為をまねる。私は拍手する。

「完璧だよ、ムッシュ。私についてきて」

私のマンションは二DKだ。一部屋は机とパソコンを置いて書斎ふうに使っている。もう一つの部屋は寝室。

「掃除をお願いね」

彼自身が掃除機になっている。掃除をし始めたので慌てて言った。

「いいの、明日からで」

ムッシュは頷いた。

「分かりました。あなたの名前は？」

「私は村瀬瞳」

「私はなんて呼べばいいのでしょうか」

「瞳でいいよ。ひとみって呼んで」

「ひとみ」

「はい」

「とても素敵な名前ですね」

私は再会を祝して、ワインを抜いた。

「ムッシュ、君と私に乾杯」

月曜日の午後八時。優はしっかりとやって来た。ダイニングに通す。ムッシュがお茶を運んで

くる。

「ムッシュ、こんにちは」

「いらっしゃいませ、店長」

「店長はいいよ。優と呼んで」

「こんにちは、ゆう」

その日は、三十分ほどして優は帰った。

「また、来てもいい」

「いいよ、この時間ならほとんどいる。いない時はメールする」

「ありがとう」

一週間に二回ぐらい優は来た。時々泊まっていく。一つしか布団がないので、彼は寝袋を持ってきた。私は吹き出した。私とムッシュは寝室で眠り、優は書斎で眠った。書斎のパソコンは寝室に移した。二つの部屋はダイニングに面していて、手洗いに行く時お互いの部屋を通ることはなかった。部屋の個別性は保たれていた。

私は彼の何を何も知らない。結婚しているのか、子供がいるのか、何も知らない。年齢さえ知らない。私達は向かい合う。相手が何者かは関係がない。前にいる人が彼だ。私が知っている以外の彼を知りたくない。私達は向かい合い、とりとめのないことを喋る。テレビのニュースだったり、新聞だったりする。私達の間にはセックスはない。だから、向かい合うことが出来る。優は時々朝ご飯を作る。おいしいというと、とても嬉しそうな顔をする。夜はムッシュと私は枕を並べて眠る。平穏な一日が過ぎていく。

春になった。私は春が嫌いだ。春は生殖のにおいに満ちている。性器である花は咲き乱れ、生殖を担う虫や鳥が飛び交う。なんていやな季節だろう。優と私とムッシュは一日中部屋の中にいた。珍しく休みが一致したのだ。テレビも一日中桜を映している。昼食後、事件が起こった。後片付けに動き出すはずのムッシュが動かない。二人はムッシュを見つめた。ムッシュが動かなくなった。

「ムッシュ」

語りかけても無反応だ。

「電池切れかなあ」

優が首をかしげた。

「ムッシュは電池で動いていたの？」

「さあ。でも、energyはFULLだよ」

「死んだ」

私がぼつりと言った。

「死んだ」

優は繰り返した。私は少し泣いた。オブジェになってしまったムッシュを二人で寝室に運んだ。優は私の肩を抱いた。私は目を閉じた。桜の花びらが舞っている。優の涙が私の胸に落ちた。強いものに突かれた。気の遠くなるエクスタシーが私の全身を震わせた。二人は満開の桜の下にいた。優の身体が離れ、やがて、降り注ぐ無数の桜の花びらの中に消えていった。彼は私の身体



にしるしを残した。生まれた瞬間に死が約束される「いのち」。永遠なんてないんだよ。

私はその命と一緒に生きていこうと思った。